

日本組織培養学会

昭和56年12月20日発行

会員通信

第45号

発行責任者

三井洋司・山本清高（老人研）

小山秀機（癌研）

常盤孝義（岡山大・医）

菅 幹雄（東北大・抗研）

東京都板橋区柴町35-2（〒173）

東京都老人研究所

電話 03-964-1131

§ 第52回総会議事録

第52回総会は、第52回研究会（世話人：真泉平治会員）会期中1981年10月28日に行われた。総会に先立ち、さる6月30日に他界されたこの会の創立者の1人である物故会員勝田甫教授（独協医科大学）に黙とうを捧げ、ご冥福を祈った。また、山田正篤会員より、追悼演説が行われた。

総会の議事および報告・承認事項は、以下のとおりである。

1. 新入会員の紹介：正会員22名、賛助会員2社（氏名、所属は別葉に記載）
2. 特別会計の中間報告
 - 1) 勝田幹子様より、故勝田甫教授のご香料の1部（50万円）を本学会にご寄付いただいた。
 - 2) 日本細胞生物学会へ、第3回国際細胞生物学会の準備金の一部として10万円寄付した。
 - 3) 本研究会の特別講演者 Paul T'so 博士の旅費の一部として、20万円支出した。以上を報告、承認した。
3. 日本組織培養学会の規約改正選挙の結果：第51回総会での承認をもとに、新しい規約改正案の賛否を郵便投票で計った。8月10日を締切り日とし、8月20日に癌研究所において小山秀機幹事長、角屋堯英幹事、鈴木淳子会員により開票を行った結果、改正案に賛成110票、反対7票、無効7票で、改正案が承認された。なお、この新しい規約は1982年4月1日から発効する。

新しい役員選挙は、来年3月中に行うこととし、選挙管理委員長に大野忠夫幹事を選んだ。
4. ビブリオグラフィー廃止について：ビブリオグラフィーは、本年度から廃止された。しかし、本年度も発行予定として、乾直道担当委員から文部省へ定期刊行物補助金の申請がなされ、内定の通知があった。そこで乾委員に補助会辞退の手続きをお願いし、同委員よりその報告を得た。なお、第49および50回研究会の抄録は、すでに演者に返却した。
5. 新学会誌の発行：会員通信44号、7ページに提案した体裁で新学会誌を発行することを承認した。名称は「組織培養研究」、英名を Tissue Culture Research Communications とし、1982年度から第1巻、1号として発行することになった。したがって、本年度は準備号である。内容は学会の諸事項および研究会の抄録を記載することになった。
6. 会員通信：新しい会員通信の委員として、三井洋司（老人研）、山本清高（老人研）、小山秀機（癌研）、常盤孝義（岡山大・医）、菅 幹雄（東北大・抗研）各会員を承認した。
7. 各委員会報告
 - 1) 組織培養用語集編集委員会
黒田行昭委員長より、活動報告があった（別項参照）。

2) 研究教育システム委員会

梅田誠委員長より、実習書「組織培養の技術」の刊行について説明があった(別項参照)。

8. 培養器材の一括購入について:角屋堯英幹事より活動報告があった(別項参照)。

9. 第3回国際細胞生物学会議について:三井洋司幹事より、現在の活動報告があった(別項参照)。

10. 第53回研究会世話人中沢恒幸会員より、第53回研究会の開催地、日時について報告があった(別項参照)。

11. 第54回研究会の世話人を黒田行昭会員にお願いし、了承をえた。

(常盤孝義, 小山秀機)

§ 第53回日本組織培養学会研究会のご案内

会期: 昭和57年5月20日(木), 21日(金)

会場: ホテル・キャスルプラザ

(名古屋駅より徒歩4分)

世話人: 中沢恒幸

(名古屋保健衛生大・医・精神神経)

電話 0562-93-2000, 内2170

シンポジウムは、神経細胞のこと(オーガナイザー・中沢恒幸), および筋肉に関すること(オーガナイザー・五島喜与太)を計画しています。

ワークショップも予定していますが、題は未定です。

特別講演者として R. Baserga 博士を予定しています。

§ 組織培養用語集編集委員会の活動状況

本学会の組織培養用語集編集委員会は、昭和54年秋に用語集作成委員会として発足し、昭和55年4月、日本植物組織培養学会の協力を得て両学会よりの委員で構成する第1回委員会を開催して以来すでに5回の委員会を重ねて、収録する1,800項目の用語の選定や、これを大・中・小の3ランクに分ける作業を行ない、書名を「組織培養辞典」として、付録、索引を加えて四六版300頁位の本として出版する計画がまとまった。

昭和56年7月、各委員が編集担当者となって、動物関係95名、植物関係22名の執筆者を、主として両学会々員の中から専門分野を考慮して選定し、会員に適当な執筆者が見当たらない場合には、一部非会員にも依頼することにして、「執筆依頼状」「刊行の趣旨」「執筆の手引」「執筆のカード」「原稿の書きかたのサンプル」などを発送した。原稿の締切りを10月10日とし、現在すでに大部分の原稿が集まっている。

印刷刊行に関しては、昭和57年度文部省科学研究費補助金研究成果刊行費の申請を行い、昭和58年3月までには学会出版センターにて印刷刊行の予定である。なお、原稿料については、文部省の研究成果刊行費が採択された場合には、制度上初版には「原稿料」としての謝礼は出せないが、再版以降市販した場合の印税について、10月27日東京で開かれた第52回本学会定例幹事会で検討され、執筆者:編集者:学会に5:1:4の比で配分する案が了承された。(国立遺伝研 黒田行昭)

§ 研究教育システム委員会からの報告

本委員会で手がけてきた「組織培養の技術」の刊行が、やっと目前にせまりました。たびたび本会員通信でもお伝えしてきましたように、本実習書は、“書いてあるように実験を進めれば、その通りに結果が出る”ような詳しい手引書として編纂してあります。学生の教育、新人の教育などへの各会員のご利用を期待しています。価格は資料編を設け、業者の方々の援助を受けたことにより、4,000円と格安になりました。また本会会員の方々は、著者割引の特典である1割5分引きの頒布価格で購入できるように致しました。申し込み書、代金支払い用の用紙を同封してありますので、宜しくご利用下さい。

研究教育システム委員会の今後の活動は、今の所計画しておりません。皆様のご意見などお寄せ下さい。ご意見を参考の上、委員会は改組などして次の企画に移ればよいと考えています。

(梅田 誠)

§ 培養器材一括予約購入の第1回申し込み結果と第2回実施について

1. 第1回申し込み結果

申込者数：47人、申込書数：86（内訳はCorning社15、住友ベークライト社9、Nunc社13、Falcon社34、Lux社15）、ケース総数：567でした。尚、契約期間中にLux社が米国マイルス社に買収される不測の事態が生じ、Lux社製品の取扱い業務が従来の総輸入元「日綿実業株式会社」から「マイルス・三共株式会社」へ、総販売元「松浪硝子工業株式会社」から「三光純薬株式会社」へ変更されました。三光純薬が納入に万全を期すと約束していますので、申し込みをなされた皆様にご迷惑はおかけしないと存じますが、もしトラブルが生じた時には私にご連絡下さい。

2. 第2回実施について

プラスチック製品につきましては従来の5社に新しく栄研器材とCostar社が参加します。申込書発送は昭和57年2月5日、申込締切日3月10日を予定し、契約期間は5月から10月までの半年間とします。

血清はプラスチック製品と同時にありますが、参加業者は10社です。ロットチェックについては、申込書に有無欄を設けますので、希望者は各自でロットチェックを行って下さい。また、ロット番号欄も設けますのでデータをお持ちの方は該当する番号を丸で囲んで下さるようお願いいたします。価格（特に牛胎児血清）については非常にむずかしい問題ですが、申込書に明記いたします。申し込み後に値上げがあれば業者に負担がかかるし、値下げがあれば申し込まれた会員の皆様にご負担がかかると思います。しかし略式ながら契約をした以上は契約不履行のないように業者・会員の皆様をお願いいたします。また、第1回でもお願いしましたが、この一括予約購入の存続データにしたいと思っておりますので必ず担当幹事を窓口にしてお申込み下さるよう重ねてお願いいたします。

(角屋 堯 英)

§ 第3回国際細胞生物学会（ICCB）に向けて（3）

1984年に東京で開かれる標記本学会に向けて準備作業が進められています。日本細胞生物学会会期中に関連の会合が持たれたので、ICCBの事務局長沖垣会員、および日本組織培養学会からの連絡委

員より、会員の皆さんに状況報告をいただきました。

☆ ICCB 準備進行状態

妹尾会長を中心に5回の準備委員会が開かれ、本年10月にこれを発展的解消して組織委員会が構成された。

プログラム委員会は、岡田善雄委員長、田代裕、藤田哲也両副委員長以下15名、財務委員会は翠川修委員長以下15名、ローカル委員会は寺山宏委員長、山田正篤副委員長以下7名の代表委員をもって出発する。

後援団体として25関連学会にお願いし、すでに15学会の後援が得られており、幅広いプログラム作りが可能となった。

運営の実務は日本コンベンション・サービスに依頼することとし、従って今後の連絡先は

〒100 東京都千代田区内幸町2-2-1

日本プレスセンタービル内

日本コンベンション・サービスKK

(担当 黒川, 岡元両氏) となる。

名古屋での第34回日本細胞生物学会大会(11月19日~21日)開会中にいくつかの集会がおこなわれ、特に総合研究B 寺山班会議(国際会議開催に関する研究)が拡大第1回組織委員会として開かれた。その結果、プログラム・財務・ローカル各委員会は、今後定期的に会合をもちそれぞれの活動を開始することとなった。

会期、会場はすでに決定しているので(1984年8月下旬 東京 京王プラザホテル)、それに応じた規模のプログラムを作る作業が始まっています。細胞培養に関連した建設的など意見を担当三井洋司会員あるいは沖垣までぜひよせて頂くよう培養学会会員諸氏にお願い申し上げます。

(沖垣 達)

☆ プログラム編成に向けて:

シンポジウムの数、ポスターと講演の比率など大筋を、岡田善雄プログラム委員長を中心に討議されつつあります。テーマの選択など詳細は、今後関連諸学会の協力を得て、徐々に煮つめていく方針と聞いています。

日本組織培養学会の会員からも、意見を募ったところ、以下の希望テーマ名が寄せられた。ICCBへの連絡委員として、集約し、意見反映の機会を持つことにします。

1. Specific cell function in vitro.
2. Cell division aging, immortalization and differentiation in vitro.
3. Growth factors.
4. Automated cytology.
5. Somatic cell genetics.
6. Cell mutant

(三井洋司)

§ 第52回研究会を開催して

準備：第52回研究会の世話人をお引きうけすることになったとき（当然のことではあるが）、メインをどうするかということで迷った。とりあえず、学識経験者のご意見をお聞きしようということで、梅田誠、佐藤温重、丸野内楳、黒木登志夫の諸先生にお集まりいただいた結果、数通りの方針案が浮かんできた。これを基礎にして講座内（といっても筒井健機助教授、長谷川紅子講師と3人）でいろいろ協議の結果、「実験技術講座」でいこうということになり、実施案の案案もつくられた。この段階で、上記4先生に小山秀機先生を加えた方々に再びお集まりいただいて実施計画案ができあがった。

講師と予定されていた先生方も快くご承諾くださり、実施への準備を進めることができた。このようなわけでアドバイスをくださった諸先生、講師となることを快諾された諸先生とそれから、運営面でご教示いただいた世話人経験者の乾先生、冲垣先生に御礼申しあげる次第である。

会場：50回総会と同じ全共連ビルを使用した理由は、講演会場と展示会場が同じフロアになる、という点にあった。さらにデモンストレーションのための部屋も隣接していたが、これは主催者がわにとっても大変に便利であった。

講演会場にはできるだけ多くテーブルを置くことにしたが、250人収容ということを考えて、うしろの方には椅子だけを配置した。これは正解であったようだ。

会場関係での心残りは、会員休憩室（談話室）を設ける余地がなかったことである。学会本部がこれを兼ねる形になったが、遠慮して不便な思いをされた方が少なくなかったことと思う。

デモンストレーション：実験技術講座のうち数題はデモンストレーションをお願いしたが、文字どうり黒山のようになってしまうと、主催者は嬉しかったが、2列目3列目の人にはお気の毒であった。「わからないということがわかった」とつぶやいて帰った方もおられた。

実施の方法について、もう少し研究する必要があるのだろうか。

しかし、デモンストレーションによって、実験技術のノーハウを、マンツーマンで教えてもらうことができるので、若い研究者には大きな魅力であったろう。

示説用の資料を講師の先生方がわざわざ持って来られたこと、裏方さんが器材や動物の準備で苦労したことなども申し添えたい。

困ったこと：来会者の人数を前以てつかむことができないのは不便であった。会場に机を入れるか、入れるとすれば何台にするかなどということは、来会者の人数がわからないときめることができない。しかし先に述べたように、一応マキシマム250名と見たのが大体当たっていた。

さらに困ったのは懇親会である。2日前に人数を先方に通告しないといけないが、費用とのかかわりが大きいので、どちらかといえばバクチのような気持ちで臨んだ。

今後の世話人の方々が同じ苦労をしないようにするためには、どうしたらよいのであろうか。

組織培養研究：展示や広告の連絡に当たった協和企画という会社の系列のデンタルダイヤモンド社（歯科雑誌の刊行をしている会社）に委託したが、何のサンプルもない創刊準備号である。お互いに相談しなければならないことが少なくなかった。「英文演題名および著者名索引」なども、頁数は少なかったが苦心したところである。いずれにせよ、抄録集が各機関で一連のシリーズとして保存されるようになったことはよろこばしい。

勝田甫先生遺品コーナー：研究会の抄録集が日本組織培養学会の機関誌になった最初の号が追悼号のような形になってしまったのも困縁のような気がする。そして、昨年（50回研究会の時）は同じ会場に勝田先生が居られたのに、今年は遺品コーナーが設けられるようなことになってしまって、ひときわ淋しい思いがした。

遺品コーナーの位置も、部屋の中にしたかったがデモンストレーション会場となったために、文字どりのコーナーになってしまった。お詫び申しあげるとともに、お世話くださった高岡先生に御礼を申しあげる次第である。

そして、最後になったが、勝田甫先生のご冥福をお祈りいたします。

（世話人 日本歯大・薬理 真 泉 平 治）

§ Bibliography 廃刊にあたって！

本学会発足からつづいてきたBibliographyが今度廃刊になった。多くの先達が苦勞をして続刊してきたものをと考えると一抹のさみしさを感じる。たしかに“Tissue Culture Studies in Japan, The annual bibliography”は、発刊当時は会員の皆様に役に立った刊行物であったであろう。私がこの刊行物の発刊にたずさわった数年前から、存続か否かの議論はあった。前任者の黒木先生が、Bibliographyを写真印刷にして編集の手間を大幅にはおいたものの、だんだん原稿が集まらなくなってきた。大きな理由の一つはBibliographyの発行が原著論文の発行から2年おくれということだろう。この忙しい時期（研究の速度の早い時）、2年前の論文をわざわざBibliographyから探す人はおそらくいなかった事と思う。最後の数年はBibliographyに投稿されるのは20～30編、残余のページをうめるため、幹事諸氏が各々原典にあたりそのSummaryをタイプし直して発行を続けてきた。さらに悪いことに、文部省の刊行補助金は毎年増加しているにもかかわらず、刊行費も上り、昭和54年度には出版経費が学会総予算の60%をこえた。ここに到って会員諸氏のご承知のようにBibliography発行の存続の可否が会員投票にかけられ大差をもって廃刊が決り今日にいたった。

一時代確かにBibliographyが学術情報の伝達に大きな役割を果たした時もあったにちがいない。しかし時代と共にその役割も終ったと考える。これからはすでに準備号として発刊されている“組織培養研究”を育てていくのが会員一人一人の義務ではなからうか。

（乾 直 道）

§ 第32回アメリカ組織培養学会見聞記

（東北大・抗研 星 宏 良）

1981年6月7日から11日にかけて、首都ワシントンで第32回アメリカ組織培養学会が開催された。乾燥し、澄みきったカリフォルニアを後にして、飛行機で飛ぶこと約6時間、アメリカ大陸の広大さに驚嘆しつつ、ワシントンに入る。西海岸に比べて、幾分湿度が高く、緑が多く、比較的日本の気候に似ているように思われた。

学会は特別シンポジウムとして、最近脚光を浴びているハイブリドーマの演題が4題とりあげられ、他に一般口演、ポスター掲示を合わせて250題の演題が発表され、日本組織培養学会の数倍の規模と、培養関係者の底辺の広さに驚ろかされた。

一般口演、ポスター掲示は、それぞれ発癌、分化、老化、増殖因子、無血清培養、ウィルス、インターフェロン、細胞遺伝学、ホルモン、無脊椎動物培養、植物培養、などと比較的多くの項目に分かれ、参加者の選択が重複しないように会場の設定が配慮されているのが感じられた。5会場で同時に発表が進行され、とても一人で全部を把握することはとうてい不可能なので、筆者が参加し、特に印象に残った演題について報告したい。

発癌・突然変異・奇形のセッションでは、1) マウスC3H/10T1/2細胞を用いて、著明な突然変異剤として知られるMNNGは、発癌の開始因子 (initiation factor) としても作用すること (C. J. Boreiko, トライアングルパーク研), 2) ヒト筋肉細胞にTPA処理すると筋組織形成 (myogenesis) が阻害されること (A. F. Miranda, コロンビア大), 3) X線やベンツピレンによるハムスター胎児細胞の発癌過程には、血清中の甲状腺ホルモンの存在が不可欠なこと (Carmia Borek, コロンビア大), 他に、4) シリアンハムスター胎児由来 (J. F. Dooly, シンシナタイ大), ヒト乳房由来 (H. S. Smith, カリフォルニア大), など上皮性細胞を用いた発癌の研究が多くなっているのが注目を引いた。

増殖因子のセッションでは、1) RNAウィルスによる形質転換細胞の産生する増殖因子 (TGF) は、熱安定性、分子量2~2.3万でEGFレセプターと競合し、EGFレセプターや小分子量タンパク質がTGF結合によりリン酸化されること (G. J. Todaro, NCI), 2) 血小板由来増殖因子 (PDGF) がWI-38細胞のレセプターへのEGF結合数を増加させること (P. D. Phillips, ウィスター研), 3) ヒト血管内皮細胞に内皮細胞増殖因子 (ECGF) を加えると細胞飽和密度が増加すること、さらにフィブロネクチン添加でコロニー形成率の増加が見られること (T. Maciag, ハーバード大), 4) T細胞増殖因子 (TCGF) の生化学特性とヒトT細胞の選択的培養にTCGFの有用なこと (R. C. Gallo, NIH), などの報告があった。新しい増殖因子の生化学的特性と生物活性の両面からの研究が精力的に行われており、このような多数の研究者から成るプロジェクトを組織できるのはアメリカならではのと思った。

無血清培地のセッションでは、1) ラット肝上皮細胞の培養には、フェツイン、インシュリンが細胞のシャーレへの付着促進 (L. Malan-Shibley, フレデリック癌研), 2) ウサギ耳軟骨細胞の有効因子としてインシュリン、FGF、リポソームとしての脂質、また、ヒトケラチノサイト細胞には牛脳下垂体抽出物の効果 (R. G. Ham, コロラド大), 3) ヒト二倍体線維芽細胞では、PDGF、EGF、インシュリン、トランスフェリン、デキサメサゾンが有効であること (Kaji, ウィスター研), 4) 長期継代培養には、牛血清アルブミン、フィブロネクチンの添加が有効である (Hoshi, 東北大), などの報告がなされた。

今回の発表では、線維芽細胞、上皮性細胞のいかにかわらず正常細胞の無血清培養には、脂質が重要な因子となることが指摘された。

老化のセッションでは、1) ヒト線維芽細胞の分化のマーカーとしてコーチゾンレダクターゼ酵素活性と細胞老化の相関を調べた (V. J. Cristofalo, ウィスター研), 2) 上皮性細胞の老化モデル系として、血管内皮細胞 (E. M. Levine, ウィスター研), 副腎皮質細胞 (P. J. Hornsby, カリフォルニア大), などの報告があった。

全体的印象としては、1) 会場のスペースがゆったり確保されており、討論がかなり活発に行われる

よう配慮されていること、2) 正常上皮性細胞の培養法がある程度確立され種々の分野に利用され始めていること、3) 無血清培養法が、増殖因子の作用機序解明、機能を保有した細胞の選択的培養、生理活性物質の生産、など広い分野に応用されつつあることを感じた。

§ 北から南から — 研究室だより —

☆東北大学抗酸菌病研究所細胞生物部門

仙台市の中心、東一番丁から北へ徒歩約10分、医学部の北面に当研究所は位置している。研究所は昭和18年に結核(菌)の研究を目的として設立され、次第に癌研究に主力を移し、現在に至っている。従って「抗酸菌」という名称は、今日においては適切といえないが、長い間、呼びならわされているため目下のところ改称する機運はないようである。しかし、英語名には Research Institute for Tuberculosis and Cancer と Cancer の文字を入れるようにしている。研究所には、基礎、臨床あわせて13部門あるが、その中にはユニークな部門もいくつかある。当部門も、当初は微生物部門として発足したが、最近、細胞生物部門と改称された。以前より、細胞生物学的研究しか行われていなかったから、実体と名称が一致するようになった訳である。当部門は、もっぱら、培養動物細胞を使用した研究のみが行われているという点が特長で、教室の配置もいかに効率よく培養操作ができるかという点を考慮して決められている。すなわち、中心に培養室があり、その周囲に培養準備室、一般実験室、化学実験室、恒温室、RI室などが配置されている。ここ数年、培養設備の更新がすすめられ、炭酸ガス培養器はフラッシュ型が4台、またクリーン・ベンチも2台使用されている。構成員は、現在14名。教授、助教授、助手2、技官1、大学院生1、大学院研究生4、その他3である。そのうち組織培養学会の会員は、入会したばかりの2名を加え4名である。研究は大きく3つの分野に分かれており、山根教授が一貫して追及している無血清培地、無血清培養の研究、松谷助教授を中心とした、細胞融合とその応用の研究、佐藤助手を中心とした、インターフェロンの研究である。無血清培養の研究では、ヒト二倍体線維芽細胞を用いた、無血清培地、増殖因子の研究が行われており、細胞融合の研究では、ヒト-ヒト融合系を用いた、monoclonal antibody 生成系の確立を目ざして研究がすすめられている。インターフェロンの研究では、自発産生細胞株の開発に成功し、その産生機序の解析をすすめている。ここ数年、教室員の異動が著しく、教授、助教授を除くと、全員が在籍10年未満、そのうち3名は1年未満という若い構成員のため、研究のみならず、スポーツ、コンパなども盛んで、今年の春季抗研野球大会では、基礎連合チームの主力として活躍し、見事、準優勝をかざっている。

東北地方には、同じような研究施設が少ないのが悩みの種で、昨年には同窓会を設立し、少なくとも年1回は会を催して親睦を画するなど努力はしているが、他の研究者との交流の機会も、学会の時などに限られがちのため、気軽に意見交換のできる機会があればと常々考えている。

(菅 幹 雄)

☆岡山大学医学部癌研病理部門

岡山大学医学部付属癌源研究施設は、実質、三部門からなり、病理学部門、生化学部門、ウイルス学部門がある。私共の病理学部門は組織培養を利用した癌の本体の解明が究極の目標となっている。主テーマは、1) 機能を保持するヒトおよびラット肝実質細胞の初代培養と株化、2) 培養内自然発癌機構、3) アミノアゾ色素による肝細胞癌化機構、4) ヒト白血病の発生機構、などである。これらの研究テ

ーマについて、総勢13名の教室員、すなわち、佐藤二郎(教授)、常盤孝義(講師)、宮崎正博、中林秀和、宮本寛治(助手)、矢部玉江、宮野恵子、岡賢二(技官)他、大学院生、研究生によって、細胞病理学的、遺伝学的、生化学的解析が進められている。

当教室には、上記の研究活動とは別に、細胞株の保存維持、供給に関する活動がある。これは1977年、教室に併設された株センターにおいて進められているものである。今日まで学内外の研究機関から受け入れ、凍結保存された細胞株は160株有余におよび、また、他の研究機関への細胞株の分与は457株にいたっている。JTC株は、利用可能な19株が保存されている。当センターでは、株細胞のより有効な保存、供給法の開発、低温保存機構の解明などの地道な研究活動も行われている。

(常盤孝義)

§ FREE OF CHARGE!!

「組織培養用語集資料 続編」(理化学研究所ライフサイエンス推進部動物培養細胞情報専門部会編、1981年7月刊)は、さきに申し込みをいただき、申し込みをいただいた会員には無料で進呈いたしました。

まだ残部がありますので、追加申し込みを受付けます。非会員についても残部あり次第さしあげますのでお申し込みください。

ただし残部品切れの際は発送を打ち切りますのであらかじめご了承ください。

申込先： 松村外志張 〒108 東京都港区白金台4-6-1

東京大学医科学研究所癌細胞学研究室

§ 会員名簿について

1982年版の会員名簿を次回の会員通信(1982年3月発行)と同時に会員の皆さまにお送りする予定です。前回(1980年)の会員名簿以降所属などの移動があった方または名簿に誤りのある方は同封の用紙に訂正し、1月末までに日本学会事務センター日本組織培養学会係(〒113 東京都文京区弥生2-4-16)までお送りください。

§ 編集後記

師走のあわただしい時期。いや、新年に備えて満を持している頃に、会員通信、お送りいたします。編集スタッフが変わったといっても、内味がすっかり変わるわけではありませんが、真面目な中にも、少しづつ柔かい記事を書いていこうと、硬くなった頭で、考えております。

良い年をお迎えください。

(Y.M. & K.Y.)